

# 地域包括ケア時代の 薬局・薬剤師の役割



ファルメディコ株式会社  
大阪大学大学院医学系研究科  
統合医療学寄附講座  
医師・医学博士 狭間 研至

## 第16回 将来の役割を積み上げ式ではなく逆算的に考えよう

**社会保障システムが変革するいま  
現在の業務から薬剤師の将来像は描けない**

高齢化と少子化が同時に進行する我が国において、最近の医療業界は大きく変わりつつあります。高度成長期時代に設計された社会保障システムの限界が明らかになり、新しい地域医療の在り方など、いろいろな面で今まで行ってこなかったような変革が求められています。その中で、少ない自己負担で高品質な医療が受けられる社会保障制度を続けていくために、少しずつでもアクションを起こそうとしている医療者は多いのではないかと思います。

もちろん、医療専門職の1つとしての薬剤師も事情は同じです。在宅医療、外来化学療法、輸液など、今までのいわゆる外来調剤の仕事の範疇を超え、調剤以外のOTC医薬品や健康食品、さらには予防医療や生活習慣病指導への参画など、活躍すべきフィールドは広まっているように感じられます。

しかし、毎日の薬局での外来調剤業務の中で、「早く、正しく、わかりやすく」をモットーに処方箋応需・処方監査・調剤・服薬指導・薬歴管理という仕事を着実にこなしていくことに忙殺されていると、薬剤師の新しい可能性が自分にも関係あることになるとは、なかなか思い浮かべることが難しく、自分の将来像として考えづらいというのが実際のところではないでしょうか。

薬剤師の新しい在り方やイメージは、現在の業務の延長上に見えてくるモノではないと思っています。つまり、現在の「門前薬局で処方箋調剤業務に専念する薬剤師」の世代を薬剤師2.0とすれば、「地域包括ケアを実現するために薬学的専門性を活かした対人業務を展開する薬剤師」、つまり薬剤師3.0とでは世代が異なることから、明確なギャップが両者の間には存在するはずで、そのことを考えると、薬剤師に限れば、現在の業務から積み上げ式で自分の将来像を考えるこ

とはおすすめしない、というのが私の考えです。

**治療から予防へと高まる医療ニーズ  
「地域包括ケア」から果たすべき役割が明確に**

では、どうすればいいのか。答えは簡単です。薬剤師は将来、医療全体の中でどのような役割を果たすべきかということを逆算的に考え、現在までつなげていけばいいのです。その際に、「地域包括ケア」という考え方が明確に示されたことの意義は大きいと思います。「住み慣れた場所で最期まで」過ごすことを目標とした「地域包括ケア」では、在宅・介護施設で長期にわたって療養し、自然な経過としての最期を迎えられる患者さんが増えてくるはずで、

そのような患者さんは、一人で医療機関を受診し、処方箋を受け取り、コンプライアンスを保ちながらきちんと服薬し、その間にどういうことが起こったかをきちんと医師に伝えなければいけません。高齢化・認知症の存在・運動機能の低下などによって困難になります。したがって、在宅訪問診療や薬剤師による居宅療養管理指導は、薬物治療の質的担保と安全性の確保のために不可欠であることがわかります。

国民医療費の高騰のほか、がん治療や手術を費用の面で断念せずに受けていくためには、国費を用いないセルフメディケーションの推進が不可欠です。また、OTC医薬品も医療用医薬品と同様、販売した薬剤師がその後の経過や結果を確認し、必要に応じて患者や医師にフィードバックすることが必要です。

さらに、予防は治療の3倍のコストパフォーマンスがあることから、予防医療への積極的な取り組みの1つとして、生活習慣病の改善や機能性食品の使用の意義は大きいと考えられます。こういった医療ニーズが今後急速に高まることを踏まえて逆算的に考えると、地域包括ケア時代の薬局や薬剤師の役割は、明確に浮き彫りになってくるのではないかと思います。